

Sonora XJで 時間・コストを削減

昭和印刷株式会社

**Kodak**

Sonora XJ プロセスフリープレートのおかげで、自動現像機に関連する面倒な作業が一切なくなり、製版効率は大幅に向上。出力時間は半分に短縮され、コスト削減にも大きく貢献。

高い信用力を背景に 幅広い印刷ビジネスを展開

昭和印刷株式会社は、1950 年創業の老舗印刷会社である。名古屋市北区に本社を構え、愛知県を中心に地域密着型の印刷会社として発展を続けてきた。得意先には地元の大手金融機関や一流上場メーカーなどが顔を揃え、高い信用力で地域産業の活性化と情報・文化の向上にも貢献してきた。印刷設備は菊半裁判 4 色機 / 2 色機とオンデマンド印刷機で、従業員 25 名と少数精鋭ながらも、60 社以上に及び印刷・加工会社の協力を得て、伝票・帳票・封筒・名刺など事務用印刷物から、DM・チラシ・カタログ・ポスター・会社案内といった一般商業印刷物、さらにはパッケージや POP、ノベルティグッズまで、顧客の幅

広いニーズに対応している。なかでも伝票や帳票などの事務用印刷物は、社内倉庫に 700 種類以上の常時在庫を抱えて即納体制を構築するなど、リスクを恐れない質の高いサービスで顧客企業の心を掴んで離さない。



代表取締役社長 前崎 正太郎 氏

「機上現像という新しい技術に不安もありましたが、すべては取り越し苦労に終わりました。違和感も一切なく、スムーズに Sonora XJ に移行できました」

CTP の更新にあわせて Sonora XJ プロセスフリープレートを採用

同社は 2001 年に Kodak Trendsetter プレートセッターを導入し、CTP 化を果たして以来、プリプレスワークフローはコダック製で統一してきた。RIP には Kodak Prinergy ワークフローシステムを採用し、随時バージョンアップを重ねながら、最新の PDF ワークフローにも対応してきた。刷版もコダック製の現像有りプレートを採用し、長年にわたってトラブルなく使用してきた。ただ導入から 14 年が経ち、CTP 本体については更新時期が近づいてきたと考えていた。そうした時、同社が運命的な出会いを果たしたのが Sonora XJ プロセスフリープレートだった。代表取締役社長の前崎正太郎氏は、現像処理が一切要らない無処理版のメリットに惹かれて、すぐに社内で綿密な印刷テストを実施し、その結果を見て Sonora XJ への切り替えを決断した。同時に CTP も最新機種に入れ替えて、CTP ワークフローを一新した。製版現場も、印刷現場も、これまで使ってきたコダック製品に高い信頼を寄せていたため、大きな異論なく、導入はスムーズに決まったそうだ。すべてが順調に見える会社だったが、「不安もあった」と前崎社長は次のように話している。



生産管理部 主任 阿部 敦子 氏



菊半裁判 4 色機 / 2 色機を擁する印刷部門

「機上現像という新しいテクノロジーに不安があったのは事実です。ただ事前のテストでも違和感なくスムーズに印刷できたので、導入前の心配は取り越し苦労に過ぎませんでした。従来の現像有りプレートと変わらずあまりにもスムーズに移行できたので、拍子抜けしたというのが実感ですね」

ただ従来の刷版より画像が見えにくく、検版性が劣るのは唯一の欠点だったと指摘する。ただ、その欠点も目視だけに頼ることのない、より正確でミスのない仕事の流れを構築する良いチャンスだと考えて、Sonora XJ の採用に踏みきったそうだ。

現像処理に伴う手間とコストがゼロになりスピーディなプレート供給を実現

同社の製版工程を担当する生産管理部主任の阿部敦子氏は、Sonora XJ に入れ替えてから、作業効率が著しく向上したと次のように指摘する。「現像工程が必要ないので、刷版を出力したらそのまま印刷部門に渡せます。また現像による品質のバラツキもなく、安心して刷版を出力できます。これまでは現像液のチェックや薬剤の管理、現像機の洗浄など、メンテナンスの作業が多岐に渡りましたが、今ではこうした面倒な手間が一切なくなり、空いた時間で他の部門の業務をサポートできるようになるなど製版工程でのメリットは計り知れません」

現像有りプレートの場合、刷版品質を維持するために現像液の活性度チェックが欠かせない。同社では、毎朝、計測用刷版をテスト現像して出力状態をチェックしていた。もし NG なら現像液の補充や清掃などを行って、OK になるまで再現・再計測を繰り返す。また週末にはローラーやフィルターをすべて取り外して洗浄する。月に 1 度はガム液を交換し、2 ヶ月に 1 度は現像液も交換する。このときはローラーやフィルターだけでなく、現像槽内の清掃・洗浄も行わなくてはならなかった。Sonora XJ プロセスフリープレートに切り替えることで、こうした自動現像機のメンテナンスにかかる面倒な手間と時間が一切不要になった。それだけではない。コスト面でのメリットを強調するのは前崎社長だ。「自動現像機の維持費用が一切なくなりました。具体的には現像液、ガム液、計測用刷版の購入費用、自動現像機の電気代、水道代、廃液の処理費用がゼロになりました。これまでは週 1 回、処理業者が廃液の回収に来ていたのですが、今では月 2 回、印刷機の廃液を回収するだけです。Sonora XJ によるコスト削減効果は予測した以上でしたね」

自動現像機の保守契約料、トラブル発生時の修理費用なども考慮すると、節約された費用はさらに大きくなる。

会社の仕組み、仕事の流れを改革するために Sonora XJ を導入

マンパワーに限りのある同社が収益を高めてゆくためには、ワークフローをつねに改善しながら、社員ひとり一人が何役もこなす少数精鋭主義を貫いてゆくしかない。Sonora XJ の導入は、前崎社長にとって、単にコストや時間の削減だけでなく、会社の仕組みを変え、仕事への取り組み方を変えてゆく、きっかけづくりでもあった。実際、製版部門の負担は大きく軽減された。これまでも同社ではミスやエラーをなくし、作業効率を高めるためにワークフローを積極的に改善してきた。2010 年には、他社に先駆けて Kodak InSite を導入し、社内画面上での差分表示機能を活用したオンライン校正により校正ミスの問題を解消し、またリビジョン管理、データ入稿用に活用してきた。今回もまた Kodak Preps の最新バージョンを導入し、面付け作業のさらなるスピードアップを実現した。こうした生産現場の改革と並行して前崎社長は、営業改革にも取り組んでいる。同社の得意分野は事務用印刷物だったので、営業先は総務部門に片寄りがちだった。これを営業・販促部門まで拡大すれば受注増につながると意識改革を進めていった。さらに地元での高い信用力を背景に「企業同士をつなぐパイプ役」として顧客のお手伝いをしてくることが、結果として同社の印刷ビジネスに必ず跳ね返ってくると、前崎社長は考えている。自社のビジネスを俯瞰的に捉え、次々と改革を実行する前崎社長を、コダックのソリューションが今後も支え続けてゆくだろう。



昭和印刷株式会社

代表取締役社長：前崎正太郎

〒462-0047 愛知県名古屋市中区金城町3丁目22

TEL: 052-917-0011 (代表)

FAX: 052-917-4460

<http://www.showa-printing.co.jp/>

コダック 合同会社

〒140-0002 東京都品川区東品川4-10-13 TEL.03-6837-7285(営業代表)

大阪：050-3819-1266 名古屋：050-3819-1265 福岡：050-3819-1270

仙台：050-3819-1255 札幌：050-3819-1250 金沢：076-200-9583

製品のお問い合わせ先 JP-GCG-products@kodak.com

<http://www.kodak.co.jp>

